



北原白秋生誕140年記念

歸 去 来

北原白秋 作詞
信時 潔 作曲

山門は我が産土、
雲騰る南風のまほら、
飛ばまし、今一度。
筑紫よ、かく呼ばへば
恋ほしよ潮の落差、
火照沁む夕日の潟。

北原白秋生誕140年記念事業一覧

年	月	日	事業	内容	場所	主催
令和7年	4月	1日 ～ 9月30日	特別展「ちゃつきり節」展	「ちゃつきり節」自筆原稿、掛け軸、歌謡集「北原白秋地方民謡集」等の展示	北原白秋記念館 2階展示室	北原白秋生家 記念財団
		20日	こっぱりーの音楽会	こっぱりーのピアノの演奏を中心とした子どもから大人まで楽しめる音楽コンサート。北原白秋の童謡の他、バイオリン、フルートなどの演奏。	市民文化会館 白秋ホール (14:00～)	柳川市民文化会館 自主事業実行委員会
		4月 ～ 3月	北原白秋生家・記念館 コレクション展 ～白秋の世界～	当記念館コレクションの中から、白秋直筆の原稿、書簡、掛け軸、色紙、絵などを展示。白秋の個性あふれる筆跡の魅力とともに創作の背景を紹介。(年3回実施)	北原白秋記念館 2階展示室	北原白秋生家 記念財団
	5月	3日	北原白秋生家・記念館 ～ロビーコンサート～ 出演:ソプラノ歌手 古賀理紗	北原白秋の詩には多くの作曲家が曲を付けるほどの魅力がある。白秋の作品を中心に、柳川市出身のソプラノ歌手古賀理紗さんのロビーに響く美しい歌声をお楽しみに。	北原白秋記念館 1階ロビー	北原白秋生家 記念財団
		4日	矢留っ子 歌う会	沖端水天宮舟舞台で矢留小学校児童の合唱。	沖端水天宮舟舞台 (13:00～15:00)	柳川白秋会
		4日	矢留っ子 演奏会	沖端水天宮舟舞台で柳南中学校プラスバンド部の演奏。	沖端水天宮舟舞台 (13:00～15:00)	柳川白秋会
	7月	5日	北原白秋生家・記念館 ～ロビーコンサート～ 出演:ソプラノ歌手 古賀理紗	北原白秋の詩には多くの作曲家が曲を付けるほどの魅力がある。白秋の作品を中心に、柳川市出身のソプラノ歌手古賀理紗さんのロビーに響く美しい歌声をお楽しみに。	北原白秋記念館 1階ロビー	北原白秋生家 記念財団
		18日 ～ 30日	企画展 白秋のみた柳河 ～受け継がれる水の構図	「水の構図」において、白秋は変わりゆく柳川の町並みの中にも変わらない故郷を感じ取っていた。「水の構図」に掲載されている時の柳川と、時代の変遷の中で変わりつつも面影を残す現代の姿、住む人との関わり、未来に受け継ぐための取組について写真で表現する。	柳川市立図書館あめんぼセンター (令和7年7月18日～30日) 北原白秋生家・記念館 (令和7年8月1日～9月28日) 南関町交流拠点施設<ukara> 熊本県玉名郡南関町大字関町1230番地 (令和7年10月中旬)	北原白秋生誕140年 記念事業実行委員会
	8月	3日	水都やながわ 五つ星コンサート	国内外で活躍するトップクラスの奏者によるコンサート。	柳川市民文化会館 白秋ホール	柳川市民文化会館 自主事業実行委員会
	10月	中旬 ～ 1月	特別展 「イラストレーター・ 白秋の魅力」展 ～似顔絵・挿し絵～(仮称)	白秋は酒を飲むと、そばにいる人の似顔絵を描いて楽しみました。ほのぼのとユーモラスなタッチのイラスト展。	北原白秋生家・記念館	北原白秋生家 記念財団
		26日 ～ 11月3日	柳川市総合美術展	白秋の顕彰事業として11月2日の白秋の命日を挟んだ期間に実施。日本画、洋画、書、写真の4部門の作品を公募し、入選以上の作品を市民文化会館にて展示。	柳川市民文化会館 白秋ホール イベントホール	柳川市 柳川市教育委員会
	11月	1日 ～ 3日	白秋祭水上パレード	柳川が誇る詩聖北原白秋先生の偉大な業績を顕彰し、川下りコース沿いの郷土芸能や演奏を見ながら巡る「白秋祭水上パレード」。北原白秋への想いと幻想的な夜を感じていただけます。	市内川下りコース	柳川市観光協会
		1日 ～ 2日	北原白秋生家・記念館 ～ロビーコンサート～ 出演:ソプラノ歌手 古賀理紗	北原白秋の詩には多くの作曲家が曲を付けるほどの魅力がある。白秋の作品を中心に、柳川市出身のソプラノ歌手古賀理紗さんのロビーに響く美しい歌声をお楽しみに。	北原白秋記念館 1階ロビー	北原白秋生家 記念財団
		2日	白秋祭式典	北原白秋の遺徳を偲び、その業績を後世に継承することを目的に実施。献花、献酒、献詩、表彰、郷土芸能披露(水天宮ばやし)、合唱(矢留小学校)など。	白秋詩碑苑 (10:00～11:30)	柳川市 柳川市教育委員会

年	月	日	事業	内容	場所	主催
令和7年	11月	上旬 ～ 中旬	柳川市文化協会文化祭	カラオケ、音楽会、バレエなどの発表会。華道、園芸、パッチワーク、短歌、絵手紙などの展覧会などを開催。北原白秋をはじめとする柳川市の文人たちを顕彰する展示もあり。	柳川市民文化会館 水の郷ほか	柳川市文化協会
		12日	白秋音楽まつり	市内全小学校から児童が合唱披露。各学校ごとに児童たちが午前、午後に分かれ、白秋が作詞した童謡などを合唱。	柳川市民文化会館 白秋ホール	柳川市 柳川市教育委員会
	12月	7日	海道東征演奏会	白秋作詞、現田茂夫指揮、アンサンブルWARASUBO、海道東征合唱団。	柳川市民文化会館 白秋ホール	海道東征演奏会実行委員会（白秋のまちな音楽会）
令和8年	1月	25日	記念日サイコロ抽選会（仮称）	来館者を対象に抽選会を実施。当選者にはオリジナルグッズをプレゼント。	北原白秋生家・記念館	北原白秋生家 記念財団
		25日	北原白秋顕彰短歌大会	短歌作品を全国から募り、生誕祭に合わせて大会を開催。北原白秋の短歌分野での優れた功績を偲び、顕彰することが目的。	柳川市民文化会館 イベントホール	柳川市 柳川市教育委員会
	2月	中旬	白秋のうたとイラスト展	イラストレーター竹中俊裕氏の作画と白秋のうたを一枚の作品にした展覧会。	柳川市民文化会館 ギャラリー	北原白秋生誕140年 記念事業実行委員会
		11日	北原白秋生家・記念館 ～ロビーコンサート～ 出演：ソプラノ歌手 古賀理紗	北原白秋の詩には多くの作曲家が曲を付けるほどの魅力がある。白秋の作品を中心に、柳川市出身のソプラノ歌手古賀理紗さんのロビーに響く美しい歌声をお楽しみに。	北原白秋記念館 1階ロビー	北原白秋生家 記念財団
		15日	白秋朗読コンクール	白秋生誕140年を記念して初開催。白秋の作品を題材とし、予選を通過した参加者が朗読を披露。審査員は、加賀美幸子、檀ふみ、伊藤比呂美、中西和久。	柳川市民文化会館 白秋ホール	北原白秋生誕140年 記念事業実行委員会
	3月	20日	北原白秋生家・記念館 ～ロビーコンサート～ 出演：ソプラノ歌手 古賀理紗	北原白秋の詩には多くの作曲家が曲を付けるほどの魅力がある。白秋の作品を中心に、柳川市出身のソプラノ歌手古賀理紗さんのロビーに響く美しい歌声をお楽しみに。	北原白秋記念館 1階ロビー	北原白秋生家 記念財団

※主催者の都合で変更になる場合がございます。（令和7年6月発行時点での予定）

なお、有料のイベントや入館料が必要な場合がありますので、詳しい内容については、主催者にお問い合わせください。

その他のご不明な点等については、北原白秋生誕140年記念事業実行委員会（事務局：生涯学習課文化係：77-8836）まで。

お問い合わせ	北原白秋生誕140年記念事業実行委員会	〒832-0058 柳川市上宮永町43番地 1	0944-77-8836
	柳川白秋会	〒832-0065 柳川市矢留本町30	0944-73-2427
	公益財団法人 北原白秋生家記念財団	〒832-0065 柳川市沖端町55番地 1	0944-72-6773
	柳川市文化協会	〒832-0828 柳川市三橋町正行431番地 1	0944-77-8836
	一般社団法人 柳川市観光協会	〒832-0065 柳川市沖端町35	0944-73-2145

北原白秋生誕140年
記念合唱コンサート



北原白秋顕彰短歌大会

北原白秋 年譜

西暦	元号	年齢	事跡
1885	明治18年	0歳	1月25日、福岡県山門郡沖端村(現在の福岡県柳川市)の酒造業北原長太郎の二男(実質的には長男)として生まれる。本名、隆吉。母シケは熊本県玉名郡関外目村(現在の熊本県玉名郡南関町)の郷土石井業隆の二女。北原家の子供たちは母の里である石井家で生まれ静養の後、柳川へ戻った。異母姉カヨ、弟妹に鉄雄、チカ、イエ、義雄がいる。
1895	明治28年	10歳	矢留尋常小学校を卒業、柳河高等小学校(4年制)に入学。
1897	明治30年	12歳	2年飛び級で県立中学伝習館に入学。
1900	明治33年	15歳	中学三年生、『若菜集』や『文庫』『明星』に親しみ、短歌初作。
1901	明治34年	16歳	沖端の大火に類焼、家産傾く。友人と回覧雑誌を出し、筆名を白秋と決定。妹チカ(10歳)、外祖父業隆死去。
1902	明治35年	17歳	10月、『文庫』に短歌一首が服部躬治の選で掲載される。次第に学業を怠り父と衝突、神経衰弱のため休学し阿蘇に転地療養。
1903	明治36年	18歳	級長として中学5年に復学、校内新聞を出し学校当局の忌諱に触れる。『文庫』歌壇より詩壇に移り、選者の河井醉茗に認められる。
1904	明治37年	19歳	2月13日、親友中島鎮夫が「露探」の嫌疑を受け、白秋に遺書を残し自刃。長詩「林下の黙想」『文庫』4月号に一挙掲載される。中学卒業間際に退学し、上京して早稲田大学高等预科に入学。
1906	明治39年	21歳	春、与謝野寛・晶子を訪問。
1907	明治40年	22歳	7月末から8月末まで、与謝野寛・吉井勇・太田正雄(木下杢太郎)・平野万里を柳川に招き、天草島(現在の熊本県天草市ほか)など西九州を巡歴。五人交互に紀行文「五足の靴」を草し『東京二六新聞』に連載。
1908	明治41年	23歳	12月、杢太郎ら詩人と『方寸』に拠る画家と「パンの会」を起こす。
1909	明治42年	24歳	1月、『スバル』創刊し主要な同人となる。3月、処女詩集『邪宗門』刊行。10月、詩誌『屋上庭園』を創刊。12月、生家破産のため一時帰郷。
1911	明治44年	26歳	6月、『思ひ出』刊行。9月、出版記念会の席上で上田敏に激賞される。10月、『文章世界』の明治十大文豪投票で、詩人の部第一位となる。11月、『朱槿』創刊。
1912	明治45年 大正元年	27歳	この年、家族が上京。7月、隣家の夫人松下俊子の夫から姦通罪として告訴され、俊子とともに市ヶ谷の未決監に拘留、8月に示談が成立し免訴となる。
1913	大正2年	28歳	1月2日、思いつめ三浦三崎(現在の神奈川県三浦市)に漢学者公田連太郎を訪ねる。同月、処女歌集『桐の花』刊行。4月、俊子と結婚。5月、一家で三崎の異人館に移住。7月、『東京景物詩及其他』刊行。9月一家は帰京、白秋と俊子のみ残る。10月、三崎の見桃寺に移住。同月、「城ヶ島の雨」作詞。
1914	大正3年	29歳	2月、小笠原父島に移住。7月、帰京、俊子と離別。9月、「地上巡礼」を創刊、『真珠抄』刊行。12月、『白金之独楽』刊行。
1915	大正4年	30歳	4月、弟鉄雄と阿蘭陀書房を設立し『A R S』創刊。8月、『雲母集』刊行。
1916	大正5年	31歳	5月、江口章子と結婚。7月、江戸川べりの小岩に移って葛飾での生活を続ける。「巡礼詩社」を「紫烟草舎」と改称、『烟草の花』を創刊。極貧の中雀に親しむ。
1918	大正7年	33歳	2月、小田原十字お花畑(現在の神奈川県小田原市)に転居、7月鈴木三重吉『赤い鳥』創刊で童謡と児童詩の面を担当。秋、小田原天神山の伝蔵寺に寄寓。11月より「雀の生活」を『大観』に連載。
1919	大正8年	34歳	夏、「木兎の家」を建てる。9月『白秋小唄集』、10月童謡集『とんぼの目玉』刊行。
1920	大正9年	35歳	2月、『雀の生活』刊行。5月、隣接地に赤瓦の洋館を新築、地鎮祭の夜、章子出奔。6月、離婚。
1921	大正10年	36歳	4月、佐藤菊子と結婚。8月、歌集『雀の卵』刊行。童謡集『兎の電報』『まざあ・ぐうす』散文集『童心』『洗心雑話』刊行。
1922	大正11年	37歳	3月、長男隆太郎生まれる。『日本の笛』『祭の笛』刊行。6月、新潟に旅行し童謡「砂山」の想を得る。『観相の秋』刊行。9月、山田耕柊と『詩と音楽』創刊。
1923	大正12年	38歳	6月、『水墨集』刊行。この年、関東大震災で山荘半壊。
1924	大正13年	39歳	4月、結社を超えた歌誌『日光』創刊の中心となる。『あしの葉』『お話・日本の童謡』刊行。
1925	大正14年	40歳	6月、長女篁子生まれる。『季節の窓』『子供の村』刊行。
1926	大正15年 昭和元年	41歳	5月、八年間住んだ小田原から東京谷中に移る。11月『近代風景』創刊。『二十虹』『象の子』『風景は動く』刊行。
1927	昭和2年	42歳	3月、『芸術の円光』刊行。8月『東京日日新聞』の依頼で「新日本八景」を選ぶため木曾川方面に旅行。
1928	昭和3年	43歳	7月、『大阪朝日新聞』の依頼で福岡県大刀洗から大阪まで恩地孝四郎と旅客機ドルニエ・メルクール号に乗り、日本初の芸術飛行。妻子と十九年ぶりに帰郷。『フレップ・トリップ』『花檉』刊行。
1929	昭和4年	44歳	4月、「明治大正詩史概観」発表。『緑の触角』『篁』『月と胡桃』『海豹と雲』刊行。
1931	昭和6年	46歳	9月、『北原白秋地方民謡集』刊行。
1932	昭和7年	47歳	10月、季刊『新詩論』、11月には季刊『短歌民族』創刊。『青年日本の歌』『日本幼児詩集』刊行。
1933	昭和8年	48歳	4月、『赤い鳥』との関係を断つ。『鑑賞指導・児童自由詩集成』刊行。
1934	昭和9年	49歳	1月、『白秋全集』全十八巻完結。『白南風』刊行。夏、台湾を旅行。
1935	昭和10年	50歳	6月、白秋主宰の歌誌『多磨』創刊。7月末より朝鮮半島を巡歴。11月、白秋生誕五十年を記念し「白秋を歌う夕」が日比谷公会堂で開かれる。
1936	昭和11年	51歳	夏、大和信貴山で「多磨」第一回全国大会を開催。『躍進日本の歌』刊行。
1937	昭和12年	52歳	腎臓病による眼底出血のため杏雲堂病院に入院。
1939	昭和14年	54歳	10月、交声曲詩「海道東征」と長唄「元寇」完成。「郷土飛翔吟」を収めた『夢殿』『雲と時計』刊行。
1940	昭和15年	55歳	4月、杉並区阿佐ヶ谷に転居。『黒檜』『新頌』刊行。
1941	昭和16年	56歳	3月、「海道東征」により「福岡日日新聞文化賞」授賞。式後、柳河で多磨九州大会を開き生前最後の帰省となる。5月、芸術院会員。11月、見桃寺の歌碑除幕式に出席。
1942	昭和17年	57歳	2月、病状が悪化し入院。療養中の3月、『短歌の書』刊行。母シケが倒れたと聞き、4月からは自宅に戻り病床で編集や創作。『港の旗』『朝ノ幼稚園』『満州地図』『香ひの狩獵者』を刊行。『日本伝承童謡集成』など十数冊の著作を企画、『溪流唱』『椽』の編集を終え、『水の構圖』序文を記す。11月2日午前7時50分、「新生だ」の一語を遺し死去。12月21日、多磨墓地に埋骨。